

高等教育における対面授業とWebの融合 ～『教育とコミュニケーション』における授業デザイン～

村上正行
(京都大学大学院情報学研究科)

1. はじめに

本稿では、京都大学全学共通科目『教育とコミュニケーション』の授業研究を、Web掲示板の発言を分析することによって行い、その分析をもとに授業内容とWeb掲示板との相互作用について検証・考察する。また、『教育とコミュニケーション』の授業デザインに注目し、従来行われてきた一斉授業・公開実験授業との比較を行い、特徴を明確にする。

2. 授業へのインターネットの導入

2.1 インターネット導入の経緯

京都大学で行われている公開実験授業『ライフサイクルと教育』では、「なんでも帳」を活用してきた。「なんでも帳」とは、「大福帳」(織田1991)を参考にして考案されたもので、授業に関するコメントを書きこんでいくための冊子であり、受講生1人に1冊与えられる。毎回授業終了後に回収し、そのコメントを抜粋して次の授業に活用される^{注1}。

「なんでも帳」の特徴として、織田の言う6つの特徴(1.授業出席促進(欠席防止)効果, 2.積極的受講態度形成効果, 3.教授者-学生の信頼関係形成効果, 4.授業内容の理解促進と学習定着促進効果, 5.自己努力・自己変容過程の確認効果, 6.授業内容充実効果(一斉教授方式の中で双方向性を保証する))に加えて、以下の4点の特徴があると報告されている。(大山, 1998)

A: 授業の組立に使用されるのであるから、コメントの内容は授業の内容に関連したことを書くという、暗黙の枠組みが生じる。

B: 自分のコメントがコピーされて配布される場合があるから、「人目に触れても恥ずかしくないようなコメントを書こう」という意識や「人よりいいものを書こう」という気持ちが生じ、積極的な受講態度や記述がさらに促進される。

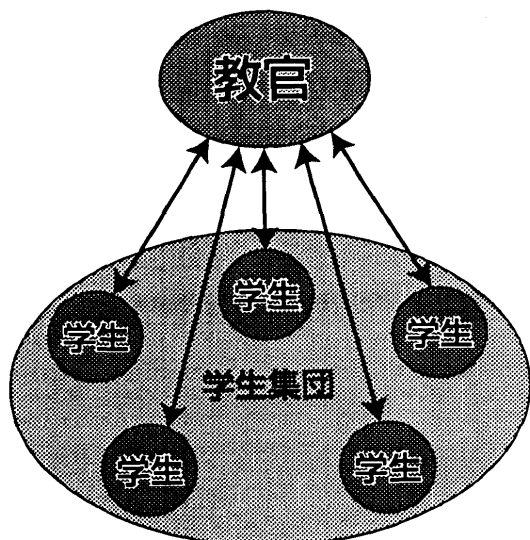
C: コメントがコピー配布される場合も想定して、そこに書かれるメッセージの受け取り手は、教授者ばかりでなく他の学生も想定されうる。従って、書かれる内容はそれを含んだ上で、自己隠蔽や自己開示がある。

D: 他の学生が書いたものを目にする為、他の学生の意見を知ることができ、それに対する意見なども書くという学生間の相互コミュニケーションも間接的ながら生じる。また、集団の中での自分の位置付けについて知ることができる。

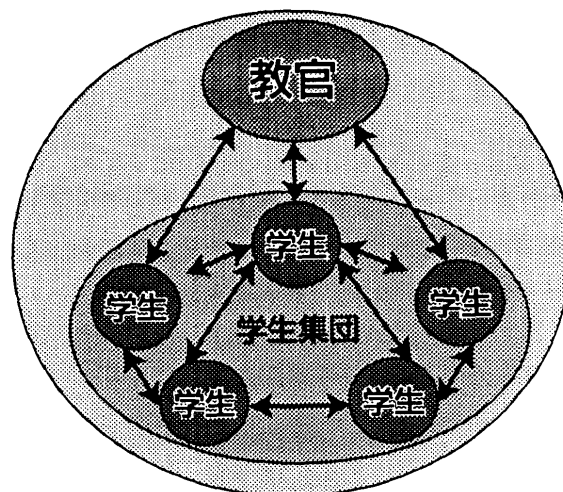
これらのように「なんでも帳」は非常に多くの利点を持っている。しかし、Dにあるように、基本的に“教授者-学生”を結びつける道具であり、学生同士が行うコミュニケーションや議論を直接カバーすることはできない。この点を克服する為に議論を行うことがあげられ、学生からの要望もあった。また、授業検討会の中でも議論の必要性についての議論は行われた。しかし、結局実行するには至らなかった。この理由は、授業の枠組みに議論がなじまなかったことがあげられよう。このような公開実験授業の枠組みを変化させ、KKJ (Kyoto Keio Joint Seminar) の試みが計画されたのである。

KKJ実践では、『高度一般教育』の一環として、人間存在にとって教育とコミュニケーションの大切さを体得

させること」を目標として計画・設計され、「なんでも帳」に取って代わるものとして「インターネット」が選ばれたのである（田中，2000）。「インターネット」は，前述した「なんでも帳」の特徴である4点を満たしており，さらに時間や距離を問題にせず双方向性コミュニケーションを容易にとることができる特徴もっており，道具としては非常に適切と言えるだろう。2つの授業の変化を示すために，「公開実験授業」とKKJ実践での京大側の授業である『教育とコミュニケーション』を，教師と学生の関係に注目して表したものをそれぞれ図1，図2に示す。



〈図1：公開実験授業〉



〈図2：『教育とコミュニケーション』〉

ただ，言うまでもないことだが，新しい道具を提供したからといって議論が起こったり，授業が良くなるとは限らない。さらに最も重要な問題として学生がのってこないという問題がある。「なんでも帳」はコミットしない学生でさえ何らかの書き込みを行うが，「インターネット」を利用する場合は強制力はないため，全くコミットしないことも考えられる。3章以降で，このような問題を抱えつつ行われた『教育とコミュニケーション』の授業をWebへの発言とともに分析しながら，Webと融合する授業デザインについて考えていく。

2.2 Web掲示板

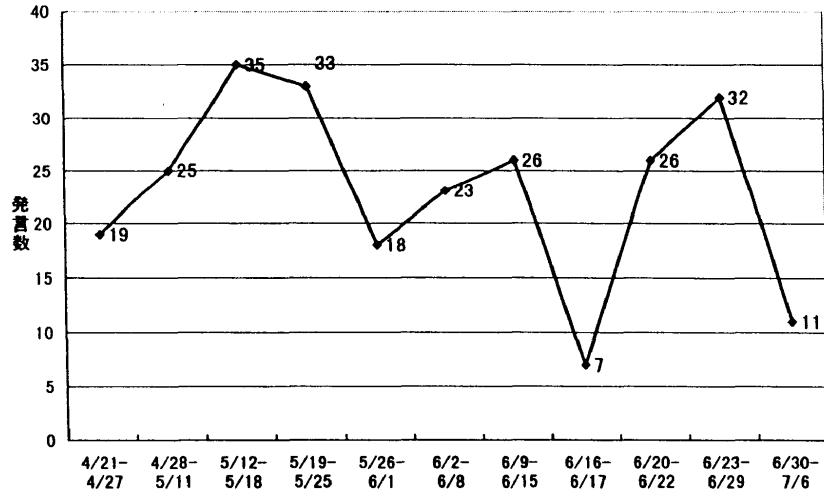
「インターネット」と言った場合，すべての機能を含むが，KKJ実践ではWeb掲示板を利用した。Web掲示板とは，自由に書き込みが出来るようにしたWebページのことであり，議論の流れを可視化できるが特徴である。このようなGUI（Graphical User Interface）を利用することで，考えを外化することができたり，他人と意見が共有できるようになる。この思想はCSCL（Computer Supported Collaborative Learning）として，現在研究・実践が進められている。（例えば，大島（1998），；益川（1999）など）

KKJ実践で利用したWeb掲示板は，慶應側のスタッフである尾澤氏によって開設された。ホームページは，パスワードによって受講者・スタッフ以外アクセスできないようにしている。テーマとして「京都大学授業概要」「慶應義塾大学授業概要」「フリートーク」「共通課題提出」「京大練習用BBS」「井下研究室練習用BBS」が準備され，さらに，5月上旬に「合同合宿企画」が追加されることとなった。またトップページには，初心者のために注意事項が明記された。

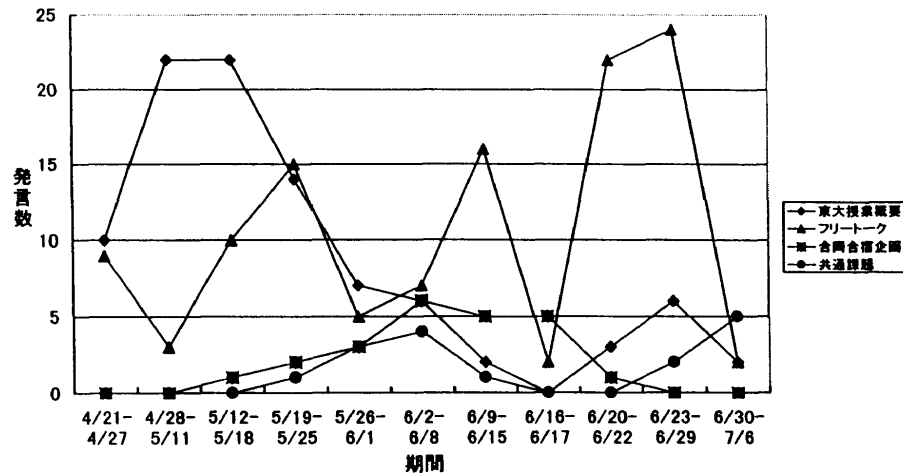
3. 授業内容とWebとの関わり

3.1 Webへの学生の発言数

『教育とコミュニケーション』では半期で計12回の授業が実施された。授業が実施された期間である4月14日から7月6日までの間で京大の学生からは合計255通の発言があった。京大学生の発言数を時系列で表したものを図3，さらに京大学生の発言数をテーマ別に時系列で表したものを図4に示す。（注4/21-4/27の場合，4/21の授業終了後から4/28の授業が始まるまで，としている。）



〈図3：京大学生の発言数〉



〈図4：京大学生のテーマ別発言数〉

図3によると、京大の学生は、授業間に25通前後とほぼ一定であり、若干多いのは5月中旬にかけてと、合宿終了直後である。しかしながら、図4によればテーマ別に見れば発言数は一定ではなく、発言が多くなされているテーマは移行していることが分かる。大まかなトピックの流れを表1で示す。

〈表1：発言の主なトピック〉

	授業概要	授業概要・合同合宿	フリートーク
4/14	オリエンテーション		
4/21	説明・「大学と私」での自己紹介		
4/28	「ライフサイクルと教育」の話題提供 ・オタク議論 ・議論の仕方について	ハンドルネームへの批判 ↓ 自己紹介 ↓ 授業への不安 ↓ ボディワーク ↓ 身体性 ↓ SFCからの提案 ↓ レクリエーション	単独投稿 ↓ 学生が話題提供 (5/6, 6/3, 6/8, 6/10) ↓ 京大と慶應との会話 ↓ クスリなど (アングラ系)
5/12	合宿について (行き方など)	合宿への期待と不安 ↓ 飲み会 ↓ フリーテーマ ↓ フリーテーマ	
5/19	ボディワーク		
5/26			
6/2	合宿について (スケジュール)		
6/9			
6/16			
6/23			

この発言のテーマの移行は授業のどのような流れによって起こっていったのであろうか。この移行について次節で詳しく見ていくことにする。

3.2 授業の流れ

前節の表2と下に引用した表2の授業概要（田口・村上（1999）より）と対応させながら考えていくことにする。

半期の授業を発言内容の特徴によって第Ⅰ期から第Ⅳ期までの4つに分けることにする。

3.2.1 第Ⅰ期（遭遇期）

1回目の授業はオリエンテーションであったので、実際の授業は2回目からスタートしたといえる。4/21（2回目）の授業では、この授業についての説明の後、受講生への課題であった「大学と私」のレポートを発表する形で自己紹介が行われた。この授業の後のWebには、授業の流れを受けついで「授業概要」「フリートーク」とともに自己紹介的な内容が発言された。まだお互いのことが分からないことなどから、まったくレス（発言に対して反応した発言のこと）はつかず、単独投稿ばかりであった。

4/28（3回目）の授業では、しばらくの間沈黙が続いた後、“オタク”と“議論の仕方”について議論されることになった。授業終了から次の授業までの2週間の間、京大授業概要を中心に議論がなされた。学生が4/28の授業での議論に対する意見、今後の授業に対する不安などを書き込んでいる。

例えば、「私達はこれでいいのか」（4/30 19:08）では、

慶應さんの授業概要紹介を読むと、何だか、「鏡映的自己像」、「ライフデザイン」といったテーマがあり、各自その課題に取り組んでいるらしいといったことが分かる。彼らには、何らのプランがあり、それに向かって、「課題提出」などを積み重ねているような感じがする。

一方、私達京大は、何を課題とするかということ自体が課題であるという状況。慶應さんが課題として取り組んでいる「鏡映的自己像」、「ライフデザイン」については何も知らない。こんな、両大学が1ヵ月ちょっと後には合宿をする。

私達はこれでいいのか、と漠然とした不安を感じる。

とあり、不安をあらわにしている。これは京大ゼミと慶應ゼミの集団形成の違いによる部分が大きいのだが、京大の学生にとっては“見えない”慶應での授業が京大での授業よりも、着実に進んでいるように見えており、苛立ちを感じていると思われる。

3.2.2 第Ⅱ期（探索期）

5/12（4回目）の授業から、大山助教授が担当となった。授業の前半で、合宿先までどうやっていくのか、また「SFC（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）へ寄りませんか」という慶應からの提案について議論が行われた。意見が出尽くしてこの後どうするのかという時点で、大山助教授からこの後の授業について、ボディーワークをする準備をしてくれているので、ボディーワークをしてもいいし、議論を続けてもいいし、どちらがいいかを学生達で選んでくれたらいい、という提案を行った。ある学生が「集団の一体感がほしい」という意見を言い、これをきっかけとしてボディーワークを行うことになった。場所をピロティに移して「人の手を触る」「ブラインドウォーク」などを行った。

この後のWebには、「授業概要」のページに、「いいぞボディーワーク！」（5/12 17:57）を皮切りにしてボディーワークに対してなどの肯定的な意見がどんどん書き込まれ、前回の2週間と同じだけの発言が1週間の内になされた。今まで抱いていた不安を転換したと考えられる。これをきっかけに『教コミ』集団として結びついてきたといえる。

〈表2：授業概要〉

授業日	出席教官	授業概要	備考
第1回 4月14日	田中毎実 石村雅雄 大山泰宏 溝上慎一	オリエンテーション ・授業のテーマと簡単な目的、合宿についての説明（神藤） ・集中ゼミ、連携、メディアを利用することの意味についての説明（田中） ・スタッフの自己紹介（スタッフ全員）	人数超過のため スタッフで受講 者を22名（←29 名に決定）
第2回 4月21日	田中毎実 石村雅雄 大山泰宏 溝上慎一 神藤貴昭	アイスブレイキング ・ホームページの記入について（神藤） ・井下ゼミと、ゼミの論文集の紹介（神藤・石村） ・「大学と私」をもとに自己紹介&懇親会（学生及びスタッフ） ・ハンドルネームで投稿するか本名で投稿するかという議論が自然発生	会費制により、 ビールと軽食
第3回 4月28日	田中毎実 大山泰宏 神藤貴昭	事務連絡&田中先生より話題提供 ・教官側の自己紹介文配布その他連絡等（神藤） ・平成9年度授業「ライフサイクルと教育」より話題提供（田中） 学生から、授業と電子会議室の差がわかりにくいとの質問あり ・「オタク」議論と議論の仕方（メタ論議）について（学生）	
第4回 5月12日	田中毎実 大山泰宏 神藤貴昭	合宿について&ボディーワーク ・合宿先までどうやって行くかなど（大山） ・ボディーワーク～ブラインドウォーク等～（大山）	
第5回 5月19日	田中毎実 大山泰宏 神藤貴昭	合宿について&ボディーワーク ・合宿先について（司会－学生） ・京都大学事務連絡専用のメーリングリストを作るかどうかを検討（学生） ・ボディーワーク～天国への階段～（大山）	学生間で電話 番号とメール アドレスの交 換
第6回 5月26日	田中毎実 大山泰宏 神藤貴昭	合宿について&ボディーワーク ・自己紹介をHPに載せるかどうか、コンパについて話し合い（学生）→結果は掲示板に ・合宿について－合宿係、会計係、コンパ係の決定（学生） ・ボディーワーク～ペア探し&吉田山までブラインドウォーク～（大山）	
第7回 6月2日	田中毎実 大山泰宏 神藤貴昭	ホームページ上の議論に関して ・ホームページ上で行われている議論について（田中） ・合宿について（合宿係）→何を話したいか次回までのレジメを作ることに いくつもの議論（学生） （日本の）コミュニケーションについて／ガイドライン法案について ・授業についての質問（論文を作るのか？目的がわかりにくいなど）（学生より）	
(6月8日)		京大スタッフ（田中・神藤）の慶應井下ゼミ訪問	
第8回 6月9日	田中毎実 大山泰宏 溝上慎一 神藤貴昭	合宿に向けて（尾澤さんと磯松さん来京） ・SFCスタッフ尾澤さんと学生の自己紹介 ・6月8日の慶應義塾大学訪問についての報告（田中・神藤） ・セッションの内容についての議論（学生）	
(6月10日)		学生主催のコンパ（田中・石村・大山・神藤・田口・村上も参加）	
第9回 6月16日	田中毎実 石村雅雄 大山泰宏 溝上慎一 神藤貴昭	合宿に向けて ・事務連絡（神藤） ・合宿に関する議論（学生） 新しい係の決定（名刺交換会係、お酒係、音響係） レクリエーションをどうするか	
合同合宿 6月18日 6月20日	田中毎実 石村雅雄 大山泰宏 神藤貴昭	合同合宿 ・名刺交換会・セッション0（「合宿のテーマと流れをどうするか」全体ディスカッション） ・セッション1（「大学と私」小グループディスカッション） ・セッション2（テーマ別グループディスカッション） ・セッション3（テーマ別グループディスカッション） ・セッション4（全体飲み会） ・セッション5（合宿を通しての全体ディスカッション）	
第10回 6月23日	田中毎実 石村雅雄 大山泰宏 溝上慎一 神藤貴昭	合宿の総括 ・合宿に関する総括をすることの提案（石村） 3グループに分かれて、合宿のことについて話し合い、結果を発表（学生） ・メーリングリストを作ることを提案（学生）→作ることに決定 ・合宿の感想を次回までに記入してくることを提案（石村）	
第11回 6月30日	田中毎実 石村雅雄 大山泰宏 溝上慎一 神藤貴昭	合宿の総括 ・ホームページに関する議論（学生） ・グループ別討論をすることの提案（石村） 話題別の3つのグループに別れて討論、話し合った結果を発表（学生） ・メーリングリストやチャットについての議論（学生）	
第12回 7月7日	田中毎実 石村雅雄 大山泰宏 溝上慎一 神藤貴昭	最終授業 ・合宿会計について（合宿係） ・論文について（内容、期限、作成型態、印刷や製本など）の議論（学生） 打ち上げパーティ	会費制により、 ビールと軽食

田口・村上（1999）より引用

また、5月になってから「フリートーク」に発言の投げかけが行われるようになってきている。授業以外の内容で、京大内部の結びつきを強めたいと思う一方で、見えない慶應の学生へのアプローチを図っているといえる。例えば、「普通の書きこみのようなことをしてみます。」(5/13 02:18)では、その日の感想などを書いて反応を待つ、というやり取りを期待している。しかし、まだこのころはレスが1回ついて終わりというような細切れなやりとりが続いている。相手の顔が見えない、顔と名前が一致しないということが会話まで行かない原因だろう。

5/19、26の授業でも合宿へ向けての議論とボディワークを行った。授業を重ねてきたことに加えて、この頃から名札をつけるようになり、これらのことによって京大内部では、顔と名前が一致するようになっており、京大の学生に限って言えばお互いの存在がはっきりしてきたといえる。

この期間でのWebへの発言は、「授業概要」に関して言えば、落ち着いてきて発言数も減少傾向にあった。これは大山助教授の3回の授業で落ち着きを見たことが考えられる。それに対して、このあたりから「フリートーク」、利用されていなかった「共通課題」に発言が投げかけられた。突破口となったのは、「フリートーク」では「クスリ」(5/19 12:55)、「共通課題」では「このページは、< >ページです。」(5/27 04:01)であり、同じ学生が発したものである。内容としては非常に抽象的な問いであったが、京大の学生がお互い分かってきた頃ということもあり、一部の学生がのってきた。これに端を発して発言が重ねられていった。「共通課題」というテーマは、授業当初から準備されたテーマであったが、授業との位置付けがされず、逆にこの学生が利用した形となったといえるだろう。

また、5月から「合同合宿」のページができ、こちらの方では合宿の内容、交通手段など実務的な議論や報告がなされ、発言は「授業概要」から徐々に合同合宿の方にシフトしてくるようになった。また、「授業の時間がなければWebで」「Webの議論をもとに授業で」という授業とWebとの関係も有機的になってきた。

3.2.3 第Ⅲ期（確立期）

6/2(7回目)の授業から部屋に戻り、田中教授のもと、合宿の内容についての議論がなされた。合宿の計画に関して言えば、教官やWebを通して慶應側からの提案がどんどんなされ、京大側の学生は“慶應主導で動いている”印象を受けていた。とくに教官を通しての提案は、京大学生の反発を買い、このあたりから慶應への対抗意識を個々に持ち始めたと思われる。この対抗意識は、6/9(8回目)の授業の時に慶應の学生2人が来た時に顕著に表れ、慶應の代表としての意見をどんどん求めていった。

「フリートーク」や「合同合宿」でも、発言し始めた慶應の学生に対してレスを返したり、慶應の学生へ問いかけをしたりして、慶應の学生へのアプローチを積極的に行った。それを受けて慶應の学生も返答し、徐々に京大と慶應の学生の発言が噛み合い出した。この時期に2回目の波をむかえたといえる。

ただ、京大内部でも“タスク派”と“プロセス派”に分かれて議論が進行されたこともあって、完全に一致団結して慶應に対抗しようという意識があったわけではなく、ゆるやかなグループ形成がなされていったと思われる。

3.2.4 第Ⅳ期（終焉期）

合宿終了後は、予想されたことではあったが、合宿の感想、感謝の発言が爆発的に増え、Web上での京大、慶應の分け隔てはほぼ無くなったといえる。

「Re:合宿終わり」 6/20 23:11

疲れた～さすがに寝てへんし

帰りの電車の中で改めてみんなの自己紹介文よみなおしてみた

今までただ単に「慶應の人」やったのがそれぞれ個々の人として感じられた

今掲示板見た時もはじめて投稿者の名前を意識したって言うか

なんかほんまみんなの顔が目浮かぶ

なんかおもしろいね

この発言でわかるように、顔と名前が一致し、相手を明確に意識したことが発言の増加につながっているといえる。合宿の肯定的な感想が出ている中で、まとめの段階を意識している発言も見うけられる。

「どうまとめよう？」 6/21 11:07

今回の合宿は、僕にとって今までにないものを与えてくれました。

ほとんど無計画に近いような、そんなところから皆がそれぞれの意志を持ってパワーを提供し、そして出来上がった数々の出来事。今までになかった合宿だけに、それをどうやって総括して行くのかも、また僕にとっては一つの問題です。ありきたりのやり方ではまとめきれないっす。

このような発言を受けて、6/23、6/30の授業では石村助教授が担当し、グループ別の議論を行って合宿のまとめを行った。合宿にならってプレゼンテーションを行ってみんなで情報を共有化した。授業内では議論はしっかりと行われていたが、その内容はあまりWebに反映されなかったといえる。原因として、前に引用した発言のように、合宿での内容があまりに多すぎて、自己内で消化しようとするので精一杯であることが考えられる。

3.3 授業の区切り

3.2で授業の内容に対応させつつWebへの発言をみてきたわけだが、授業の区切りについては発言内容を中心に筆者が切り分けたものである。この区切りは授業者の交代と一致している。このことは偶然でもなければ、逆に事前に綿密に計画したものでもない。授業者が、自分が授業の中で果たすべき役割をその場その場で臨機応変に選択し、実行したことによるものだと言えるだろう。このことは、教員集団の連携が緊密に行われたことによる部分も大きい。KKJ実践の1つの目的である『高度な指導性』を形成するための教師集団内の相互学習が行われていたのである。

4. 授業とWebとの議論の相互作用

4.1 「議論のテーマ」における相互作用

3章で授業概要に沿ってWebの発言を見てきた。Webと授業の内容は関連を持っていると言えるし、相互作用・相互補完を行っていると言える。Webと授業の相互作用について「議論のテーマ」という観点から考えることにする。3.2で見たように授業での議論の内容とWebの発言の内容は非常に密接に関係しており、どちらから始まりどちらで終わった、と明確に定めるのは難しいが、議論の始まりに注目して分類し、議論の流れを見ていくことにする。

4.2 授業の議論がWebに反映されたケース

第I期では、学生にとって授業の当面の目的も課題もはっきりせず、非常にとまどっていたと言える。Webを使うといっても、特に活用方法も与えられず、どうやって利用していこうかははっきりと想像できなかったであろう。当初、ハンドルネームを利用してWebの掲示板に発言する予定であったが、まずハンドルネームを使うかどうかの問題となり、授業中に議論された。これを受けて、その後の掲示板で9名の学生がハンドルネームについて発言している。ほぼ全員がハンドルネームは不必要と言う旨の意見を述べている。

不必要論の意見として以下の発言を見てみることにする。

「Re：京都大学4/21授業概要」 4/22 19:15

前回問題となったハンドルネームについて。私は授業中にも発言したように使うのに反対である。まず、その使用の目的が、匿名を使うことによって生じる授業とは違う次元での会議を求めているのであれば、皆に認証されたハンドルネームを使用するのは矛盾が生じていると思うし、さらに、授業を振り返っての書きこみであるわけで、

そこに匿名性をもたせることによって生まれる利点はないのではなからうか。また、その目的がホームページ上のセキュリティなのであれば、アクセス時のパスワード入力により解決しているし、不特定多数が共有しているホームページならまだしも、50人前後しか共有していないホームページなので不正な進入や書きこみがあればおのずと明らかになるのではないだろうか。

また、ハンドルネームの利点・欠点を述べた発言も出されている。

「Re：京都大学4／21授業概要」 4/27 16:18

《ハンドルネーム（以下HNと略記）の使用不使用をめぐって》

私の思い付くままにHNの利点、不利点をあげると・・・

【HNを使うことで生じうる利点】

1. 安全性（中略）
2. 匿名性の確保によるのびやかさ（中略）
3. 愛称っぽく親しめるかも（中略）
4. オシャレ感覚、異次元（異自分）感覚、一種の特別服（中略）

【HNを使うことで生じうる不利点】

1. 煩雑さ（中略）
2. 不自然さ（中略）

これらの発言を受ける形で、3回目の授業でハンドルネームは用いないことになった。このような形で授業からWebにふるという方法は、第Ⅱ期以降、学生・教師ともに意識的に用いるようになっていった。このことは、授業には時間的制約があることから性急に議論を進めようとするよりも、授業間の1週間という時間を、Webを用いることによって有効に活かして議論することができることが重要だからであろう。

4.3 Webの議論が授業に反映されたケース

4.2に対して逆にWebから授業に影響を与えたケースがいくつかある。Webで提案された内容がそのまま議論になっていくケースである。ここでは、例として司会制度についての問題があげられる。発端となったのは、第Ⅰ期から第Ⅱ期への移行の段階の中に行われた以下の発言である。

「場の流れについて」 5/617:52

（前略）こんなふうに考えておりますが、司会制度を作る必要性についての考えを述べます。学生の誰かがまとめ役になり発言のネットワークをほんとにひどい混線や脱線から守り抜く。誰かがし続けるのもいいし、交代して行くのもいい。流れを読む能力が期待されるから三人位が一緒にやるのもいい。ただし、制度についての検討に時間がかかるようなら検討しないほうがいい。ためしに一回やってみても面白いかも。そんなわけで一緒に考えてみませんか。反応されるときは、気を遣って引用する必要はないです。まずは「1. 検討する必要性について」、次に「2. 制度化する必要性について」考えたい。上に述べたように僕の立場は1. とりあえず必要、2. わからない、です。

彼は、第Ⅰ期の混迷の中で、問題提起をしている。彼自身も司会制度について行うべきかどうかはこの時点でははっきりと賛否の意見を持ってはいない。この発言に対して以下のような反論が出された。

「Re：場の流れについて」 5/10 14:39

司会制度についてですが、私はその必要性はないと思います。

何十人ものゼミだったならまだしも、20名程度しかいないわけですから自由に討論すれば良いのではないでしょ

うか？みんな好きなときに好きなことを発言できれば良いのではと思うのですが・・・

たとえ一つの意見が出てそこから全く違う議論になってもそれはそれで良いのではないのでしょうか？せっかくの自由に発言できる場なのですから、堅い枠の中で討論する必要はないと思います。

逆に、そういう司会制度みたいなものを作ってしまう方が発言しにくくなる人もいるのではないのでしょうか？初めから議論をまとめようとしなくても良いと思うのです。少しづつみんなの意見がまとまっていけば良いのではないかなというのが私の考えです。

このような議論がWebで行われた後、5月12日の授業では大山助教授が進行を担当したが、5月19日の授業から、学生が進行を担当するようになった。この後日替わりで最後の授業まで学生が進行を担当することとなった。5月19日に司会を担当した学生の発言を引用する。

「司会のまねごとをやってみて」 5/25 14:53

事の成り行きと言うのは恐ろしいもので、なぜか前回の授業で司会を務めてしまった〇〇です。現実問題、合宿まで残されて時間は後わずか。その中で効率よく計画を立案するためには司会制度は必要だと、僕は思います。しかし、現実には甘くなかったというか何というか、司会はかなり難しいです。

「SFCに行くかどうか」問題では、最初の多数決で「行かない」方に手を挙げた人数人に意見を聞いた。それは多数派で押し切ることに疑問があったし、何よりなにも意見を聞かない上でこのまま結論を出すことには明らかに抵抗を感じたからです。

ところが、「交通手段」の問題では、自分が「なにを使って行くか」と「まとまって行くか・バラバラで行くか」の2つの論点を整理しきれなくて、少数派の意見を汲み取りきれず、「まとまって行こう」で押し切ってしまった気がします。どうもこの問題では、司会としてうまく立ち回れなかったかもしれません。

皆さんはどう感じたか分かりませんが、周りに流されずうまく立脚できる司会は、どうすればできるのでしょうか。

Webで問題提起をして議論を起こしていくケースは、問題提起自体が自分でもあいまいな意見であることがあり、その意見を書くことによって外化し、考えを明確にしようと試みていると考えられる。さらにその発言に返答がなされることによって議論として発展していくのである。このような議論はWebを利用していることから生み出される議論と言えよう。

4.4 授業の内容がWebに反映されたケース

4.2, 4.3では、議論自体が授業とWebで相互作用をしたという例を見た。それに対して、授業の内容が学生に触発を与えてWebへの発言を促したものもあった。数は少ないが、いろんな意味で非常に重要な発言であった。ここで例にあげるのは“身体性”の問題をとりあげたものであり、ボディーワークに影響を受けたものである。

「身体性という文脈における仮想現実と現実について」 5/20 17:10

前々から考えていた「仮想現実」と「現実」について、「身体性」との関わりから僕の考えを述べる。

「仮想現実」は、「現実」とどのような点で異なるか？それはむしろ、「仮想的」存在であるという点だ。しかしこのとき注意せねばならないのは、「仮想的」ではあるが、同時に「実質的」でもある、ということ。(実質性を欠いたものはフィクションだ。) 身体性との関連から説明するならば、それは「その空間に身を置いていない、身体的リアリティに乏しい」という意味で「仮想的」でありながら、それと同時に「あたかもそこに身を置いているかのようなはたらきをする」という意味では、すぐれて「実質的」なのである。このことは、人間が身体の高機能性を様々な形で外化させてきたことに根を持っているだろう。

そもそも、「現実」というものの自体が、個人によって射程の異なるものだろうと僕は考えている。だからそこに「仮想現実」という別の枠組みをもちこむならばやはりそこにはある程度まとまった共通認識が必要だと思うし、

今、説明したような意味から大きく外れるような「仮想現実」という言葉の使い方は、不適切だと僕は考える。

ここまで僕がこの問題にこだわるのは、ボディワークによって身体性の意味を強く意識したと同時に、このHPもまた、そのような文脈の中で捉え直されてもよいのではないか、と思ったからだ。

この投稿をきっかけに教官をも巻き込んで発言のやり取りが行われた。意見を重ねていくことによって議論は深まっていった様に思える。

ただ、この発言は専門的であったため、ある意味、京大の学生をこの議論に興味のある者と、興味がないというよりはついていけないと感じる者に明確に分化させることになった。また、慶應の学生にも難しいことが書かれているという印象を与えることとなった。

このことは、この授業の学びのテーマに関係すると言えよう。学びのカテゴリーの中で「獲得」を行った学生は『教育とコミュニケーション』に関する専門分野的テーマについての学びが多いと報告されている（溝上・田口、1999）。自分の専門へとつなげていこうという学生と、その他を学びのテーマとしている学生とは当然興味は異なってくる。実際に書いた本人は、この発言をするまではほとんど発言をしておらず、この発言をする際には文献を読んで自分の考えをまとめるのに非常に労力を使ったと話しており、このあとの大山先生の返答によって、この学生は「書きこみやすくなったが、さらなるプレッシャーも感じるようになった。」と述べている。

5. 『教育とコミュニケーション』の授業デザイン

5.1 『教育とコミュニケーション』でのインターネットの役割

本書では、KKJ実践の『教育とコミュニケーション』というインターネットを用いた授業を研究対象に取り上げているわけだが、今までにもインターネットを用いた授業は数多く報告されているわけで、KKJ実践の中でただインターネットを使ったから新しい実践というわけではない。どのような点が従来の授業と異なっているのだろうか。

従来のインターネットを活用した授業・教育は、確固たる学習目標があり、その達成に向けて授業デザインをする中でインターネットが位置付けられている。それに対して、『教育とコミュニケーション』では授業の目標が「自己探索ないしは自己形成」すること（田中、2000）にあり、その文脈を規定するためにインターネットが用いられていることがあげられる。（インターネットの実践研究における位置付けは田口・村上（1999）に詳しい。）

『KKJ実践』では自己探索や自己形成を行うための多様なコミュニケーションの機会を与えるために、様々な形でコミュニケーションの場を提供しており、今回は、授業・Web・合同合宿という3つの場が与えられていた。この3つの場を、田中（1999）は「3つのリアリティ」と呼んで授業の中でも用いていた。そのことによって、学生達も徐々に「3つのリアリティ」を意識するようになっていった。

授業、Web、合同合宿というこの「3つのリアリティ」がそれぞれ制約条件となっており、さらに動的に結びついているのである。このような動きのある場の中で、教師が状況に応じて適切な対応をすることにより、学生自身がその場で主体的に学んでいくことができるのである。

5.2 3つのリアリティ

ここで『教育とコミュニケーション』における3つのリアリティについて単独の特徴を表記し、この後、各環境の特徴を詳しく述べることにする。

	時間軸	話題	コミュニケーション	時間	議論のまとめ
Web	連続的	複数が並行 に行われる	会話の代替のような浅い ものから学術的な深い ものまで幅広い	非同期	主に発散的
授業	離散的	基本的に 1つ	授業に関連した 内容のものが多い	同期	主に収束的
合同合宿	単発	複数	様々なテーマの議論が 集中的に行われる。	同期	主に収束的

〈表3：『3つのリアリティ』の特徴〉

5.2.1 授業

授業では、教師・学生ともに同じ場で対面でコミュニケーションを行い、議論する内容も授業に関連するものになるので、同期性の取れた密度の濃いコミュニケーションをとることができる。時間的に見れば、週に1時間半と離散的な意味合いを持つ。大学では、学生同士が授業以外で時間や空間を共有することは少なく、授業のみの関わりとなるだろう。

5.2.2 Web掲示板

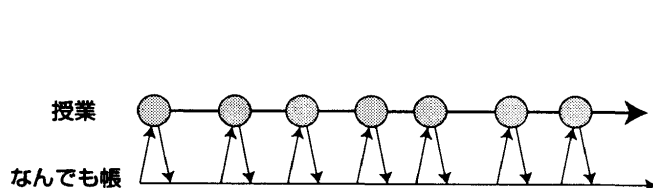
授業に対し、Web掲示板は、非同期性のコミュニケーションである。時間的には連続的な意味合いを持つと言える。発言が授業に関係ある内容である必要性はないので、議論はあいさつのような会話調で軽いものから、テーマを絞った深い内容のものまで様々である。また、発言に対して必ず反応があるとは限らない。また、書き言葉でデータとして残るので、議論を視覚的にとらえることができ、後で整理することが容易である。

5.2.3 合同合宿

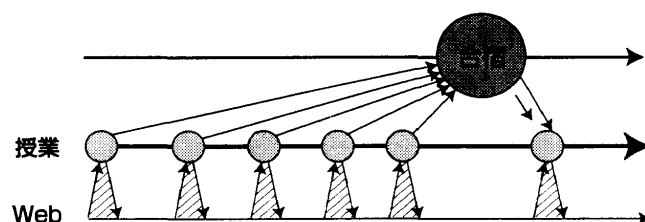
また、『教育とコミュニケーション』においては、慶應との合同合宿が目標としてデザインされている。このことが授業への取り組みに影響を及ぼしたことは間違いない。異文化集団とのネット越しでの交流、協同しての合宿づくりなど、コミュニケーションを多様にする原因となっている。

5.3 授業のモデル化

今までの議論に基づき、時間軸に従って議論の流れに注目してモデル化をはかる。公開実験授業、『教育とコミュニケーション』のモデルをそれぞれ図5、図6に示す。矢印は議論の流れを表している。



〈図5：公開実験授業の議論の流れ〉



〈図6：『教育とコミュニケーション』の議論の流れ〉

図6によれば、1週間単位で見れば、授業が始点と終点を意味し、Web掲示板が相互形成しながら関わっていくという連続的な性質を持つ。また、半期の授業として、合宿が目標となり、授業が合宿と相互形成してつながっていくとして、連続的な性質を持つ。すなわち、『教育とコミュニケーション』は3層構造をなしているといえるし、フラクタル的な要素を持っているともいえる。このことから、幾重にもコミュニケーションをする場を提供しているといえるだろう。

6. 最後に

田中は『KKJ実践』をデザインするにあたって、以下のように述べている。

まず、できるだけ多様なコミュニケーションの機会を与え、次いで、そのコミュニケーションの場をできるだけ授業者の意図に合わせて構造化しようと試みた。さらに、授業のすべての場面で、学生のイニシアティブをできるだけ徹底して重視しようとした。教員の側は、学生の主導性重視という理念を尊重して、学生をただ放任するのではなく、できるだけ高度な徹底した指導を行おうと試みた。あきらかなように、ここには、多様なコミュニケーションをうまく組織化できなかった公開実験授業での私達の反省が、生かされている。(田中, 2000)

このような意図は、5章で示した授業デザインより達成されたことは明らかであろう。『KKJ実践』において「インターネット」は1つの場として、また場をつなぐ役割として、重要な役割を果たしたと言える。しかし、これだけの場を準備すれば必ず学びが起こる、というわけでは決してなく、この準備された場の上での学生と教師の相互作用に最後は集約されるのであり、その相互作用を注意深く見ていくことによって学びがあったことが分かるのである。

本稿では『教育とコミュニケーション』の授業研究として、授業の参与観察とWebの発言分析によって学生と教師のふるまいを記述してきた。今回実施されたKKJ実践はまだはじまったばかりである。次回のプロジェクトに向けて、Webと対面授業の連携をもっと深めることができるようにWeb掲示板の修正などを行っていく必要があるだろう。

注

注1 公開実験授業については『開かれた大学授業をめざして』玉川大学出版部平成9年、「平成8年度公開実験授業の記録」京都大学高等教育叢書3、「平成9年度公開実験授業の記録」京都大学高等教育叢書4などに詳しい

参考文献

- 大島純「知識を分かち持つためのネットワーク・テクノロジー「CSILETM」」日本人工知能学会12回大会発表論文集1998年, pp110-111
- 大山泰宏「授業のフレームと日常の知ー「何でも帳」を主とした相互行為分析を通してー」京都大学高等教育研究第4号, 1998年, pp65-81
- 織田揮準「大福帳による授業改善の試みー大福帳効果の分析ー」三重大学教育学部研究紀要第42巻(教育科学), 1991年, pp165-174
- 益川弘如「協調学習支援ノートシステム「ReCoNote」が持つ相互リンク機能の効果」日本教育工学雑誌, Vol.23, No.2, 1999年, p89-p98
- 溝上慎一・田口真奈「学生主体の授業KKJ実践における学生達の学び」京都大学高等教育研究第5号, 1999年
- 田口真奈・村上正行「KKJ実践におけるインターネットの位置付けーインターネットを用いた高等教育実践研究の動向をふまえて」京都大学高等教育研究第5号, 1999年
- 田中毎実「KKJ(京都大学慶應義塾大学連携ゼミ)実践の前提と展開」京都大学高等教育叢書7, 2000年